

第一次大極殿院南面築地回廊（平城第360次）

奈良時代の前半、平城宮の正門である朱雀門の真北に、第一次大極殿が存在していました。大極殿は、天皇即位や朝賀、外国使の謁見など、もっとも重要な国家的儀式が行われた建物です。第一次大極殿は、東西178m、南北318mにおよぶ、築地回廊という区画施設で囲まれており、その区画内部を第一次大極殿院と称しています。奈良時代後半には、大極殿の機能は東の地区へ移り、大極殿院の建物は解体されました。そのうち、この地区は別の宮殿として整備され、さらに平安時代初めには平城太上天皇の居所として用いられたと推測されています。

今回の調査は、第一次大極殿を取り囲む築地回廊のうち、平城第296次（1998年度）と平城第337次（2001～02年度）との両調査区にはさまれた、南面築地回廊の西南部分を対象としました。その目的は、第一次大極殿院南辺地区の奈良時代前半から後半にかけての変遷過程を明らかにすることにあります。調査は7月2日から開始し、9月末現在ほぼ終了しています。8月23日には、現地説明会を開催しました。残暑の厳しい折、高校野球の決勝戦当日という悪条件？にもかかわらず、400名の方に現場をみていただきました。

今回の調査で明らかにされた点は、次の3点です。

第1は、南面築地回廊の柱位置が推定通りの位置に確認されたことです。今回の調査により南面築地回廊のほぼ全面について調査が完了しましたが、これまでの調査成果をあらためて確認することができました。

第2は、南面築地回廊が解体された後のこの地区的変遷が明らかになったことです。奈良時代後半、解体された南面築地回廊の北側は、これまでの見解通り礫敷の広場であることが確認できました。それとともに、同じ頃、回廊基壇の南側にも礫が敷かれていった可能性が高まりました。加えて、奈良時代前半のものと思われる築地回廊南雨落溝と礫敷が、奈良時代後半に敷かれた礫敷の下層でみつかりました。

第3は、少なくとも3時期にわたる、築地回廊北雨落溝を検出したことです。上層・下層の雨落溝はこれまでの調査所見をあらためて確認するものでしたが、中層の礫溝は、東西に見切り石をならべ、その南側（回廊基壇側）に石を敷き詰めた遺構で、南面回廊でははじめて確認されました。北雨落溝の遺

構とその北側に敷かれた内庭部分の礫敷との関係や、これらの遺構が第一次大極殿院地区の変遷のどの時期に対応するものかは、今後の検討にまちたいと思います。

翻って鑑みると、第一次大極殿院地区は、宮の中核部分として、研究所により集中的に調査対象とされてきた地区の一つでした。今回の調査はこれまでの調査成果とそこで呈示された課題に導かれながら、若干の知見をえたものといえます。一方、新たな課題も生じています。一例をあげれば、築地回廊の内側に広がる内庭部分の変遷・構造と機能にかんする問題です。その解明は、近年の古代史研究の動向ともかかわり、興味深い論点を提出すると思われます。

（平城宮跡発掘調査部 山本 崇）



平城第360次調査区全景（北東から）



現地説明会の様子